

大学—地域連携による「わかばこどものまちCBT」の取り組み

— 多様な子どもの学びの場の必要性についての検討 —

A Report of “WAKABA-CBT” Project by Partnership Between University and Regional Area

田村 光子

本稿は、植草学園小倉キャンパスにおいて2016年7月に実施された、第2回わかばこどものまちCBTの取り組みとその経過、および、わかばこどものまちCBTのスローガン「Reach to くまもと」の実際的な展開について報告する。こどものまちは全国的に展開されている取り組みであるが、あらためて子ども主体の活動の重要性、および大学—地域連携による子育て支援の場づくりの必要性について指摘した。あらたな子どもと大人の関係性を育む取り組みの醸成、および多様な子どもの学びの場づくりの意義について指摘した。

キーワード：こどものまち、わかばこどものまちCBT、子ども主体、大学—地域連携

1. はじめに

2016年7月18日（月・祝日）、植草学園小倉キャンパスを利用して「わかばこどものまちCBT」が実施された。こどものまちは、ドイツからその実践が日本に伝えられ、全国的に展開されている。千葉市においても2009年より始まり、「こどものまちCBT」として全9回実施してきた。一昨年より、市内のさまざまな地域住民から自分たちの地域で取り組みたいという声があがり、地域版「こどものまち」が生まれ始めている。本学で実施された取り組みは、千葉市若葉区の子育てNPOや若葉区子育てフォーラムが中心となって実行委員会が設立され、2015年より始まった。今回は第2回の取り組みとなる。本稿では、「わかばこどものまちCBT」について報告するとともに、その後の展開について論じ、大学—地域連携によって取り組まれた子育て支援の意義について検討を加えたい。

2. こどものまちについて

「こどものまち」とは何か。木下ら（2010）によれば「すべての子どもたちの遊びでつくられる模擬

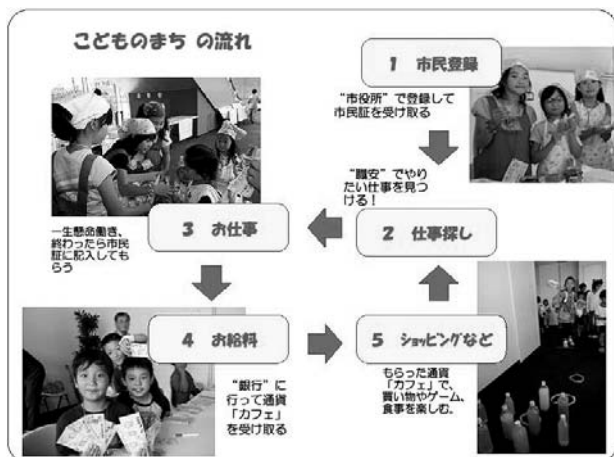
都市であり、ミニチュア版のまちのこと」であり、「まちの中では、子どもたちが主役となって、『仕事』をし、『給料』を得て、それを自由に使うべく営みを通して、まちのさまざまな遊びが展開する取り組みⁱ」としている。

日本各地で広がるこの取り組みの起源は、ドイツ・ミュンヘン市にて隔年実施されている「ミニ・ミュンヘン」にある。町の市民になれるのは子どものみ。大人は基本的に住民になれない。市民登録をし、職安で希望の仕事につき、市役所、放送局、大学、銀行等の仕事から、工房やレストラン等さまざまな仕事を得ることができる。働いて得た、その町で発行されている独自の“通貨”を使って、映画を観たり、カフェで楽しんだりできる。現実の都市で大人のみが携わるさまざまなプロセスを子どもが“遊び”として体験できるⁱⁱ。子どもたちが、遊びを通して、体験し、創造し、学びあうという魅力的なプログラムが、1990年代より日本に伝えられ、それに共感した人々を通じて取り組みが広がった。各地での取り組みが、他の地域の大人や子どもに伝えられ、次々と新たな「こどものまち」が形成されている。

千葉市の「こどものまち」の取り組みは、参加する子どもたちには「CBT」という愛称で親しまれている。これは「CHIBA-TOWN（チバタウン）」のアルファベットから、子どもたちが名付けた愛称である。「こどものまちCBT」は、2009年に「こども環境学会・千葉大会」のワークショップとして134人の子どもの市民登録から始まった。コアスタッフとなった子どもたちの要望もあり、同年には「こどもの力フォーラム」のイベントとして第2回が開催され、248人の参加、初代こども市長も誕生した。開催を重ねるごとに、コアスタッフとなる子どもたちの経験が積み重ねられ、まちも組織化していき、まちを支える大人の組織化も図られていった。現在、2016年までに9回開催されており、1,000人以上の子どもが市民登録し、まちに参加する取り組みとなっている。

全国各地で広がる取り組みは、子ども主体の参加・疑似都市の体験・独自の通貨などの要素を共通としながらも、それぞれの地域での開始の過程や大切にされる方針、意図はさまざまである。千葉市における「こどものまちCBT」では、“市役所”に登録して“市民証”を受け取り、“お仕事センター”で仕事を探し、さらに働くと“市民証”にその時間数が記入され、“銀行”にいくと通貨“カフェ”を受け取る仕組みとなっている。

“市役所”“お仕事センター”“銀行”という機能や、働いて疑似通貨“カフェ”を稼ぐ、またそれを使って遊ぶ、食べるなどの疑似都市の体験は、全国で取り込まれる「こどものまち」と同様の要素が取り入れられている。さらに、“市長”が選出される



こどものまちながれ（千葉市HPより）

というながれについても、ドイツ・ミュンヘンにおける「ミニ・ミュンヘン」からその要素を取り入れている。千葉市HPⁱⁱⁱにおいても、子どもたちが「“まち”を運営する」ことにより、「疑似社会体験をする中で、協働作業や協議による課題解決を通して、社会へ参加することを学ぶプログラム」としている。また、その効果について、「こどものまちへの参加を通じ、子どもたちは、自らの考えを表明し“まち”づくりに参画することが、自分たちの“まち”を良くしていくことを学び、社会に主体的に参加していくことの大切さを身につけてもらえる」と捉えている。

実際に、子どもたちは開催数か月前の企画をしていく段階から「コアスタッフ」となり、選出された市長のもとで“まち”づくりに意見をだし、お店や会社などを運営する準備にあたっている。年月を重ねて高校生になったコアスタッフは、まちを運営していく主要部署である市役所を担当し、はじめてコアスタッフになった子どもたちのサポート役を果たしたりしている。彼らの中には、「こどものまち」の運営をサポートする千葉市や大人組織との協議に参加する者もいる。参加していた子どもたちが成長し、大学生となって大人組織の一員となって意見を出していく様子なども見ていると、その効果は、着実に子どもたちの成長に息づいていると言える。

3. 第2回 わかばこどものまちCBTの取り組みについて

こうした取り組みの魅力が、参加する子どもたちだけでなく、千葉市の各地域の大人にも受け継がれ、周辺のいくつかの地域にひろがり、「地域版CBT」が始動している。「こどものまちCBT」は、千葉市中央区にある「きぼーる・こども交流館」において実施されてきた。その取り組みに参加、賛同した子どもや保護者、また子育て支援団体等から、自らの地域にもこどものまちをつくりたいという思いが芽生え、「地域版CBT」が千葉市の各地域で立ち上がっていった。わかばこどものまちCBTは、長年、若葉区の子育て支援を推進してきた若葉子育てフォーラムが母体となり、平成27年4月から活動を開始した。初めての説明会では、若葉区を中心に「こどものまちを立ち上げたい」という思いを

もった保護者や小学生が集結し、90名もの参加があった。その後、わかばこどものまちCBT実行委員会が中心となり、全6回のコアスタッフ会議を通して、平成27年7月18日、第1回わかばこどものまちCBTが千城台コミュニティセンターの体育館にて実施された。植草学園短期大学からも、数名の学生がボランティアとしてコアスタッフ会議および当日の大人スタッフとして参加した。

第2回わかばこどものまちCBTは、上記の経験を踏まえて、前年度に参加、賛同した子どもたち、保護者達を中心に展開された。会場については、実行委員会より依頼をうけて、植草学園小倉キャンパスが選ばれた。前回同様、わかば子育てフォーラムとの共同実施となった。また、若葉区の取り組みということで、近くにある東京情報大学の学生、研究室の参加もあり、大学連携としての取り組みにもなっていた。平成28年5月7日に説明会が始動し、全7回のコアスタッフ会議を経て、平成28年7月18日(月・祝日)に実施された。はじめての会場ということで、コアスタッフも大人スタッフも緊張がみられたが、前日準備では、子どもたちが自らの仕事に思い思いに取り組む姿が見られた。第7回コアスタッフ会議には、筆者が外国人研究者(クリスチャン・インドルフ氏:ベルン大学)を同行して見学をすると、子どもたちは自分たちの雄姿を見せたいと、外国人に自ら積極的に話しかける様子が見られた。けん玉検定を担当する子ども自身が一生懸命けん玉を外国人研究者に教える姿も見られ、子どもたちが主体的にまちに参加し、まちをつくっていき

という意気込みが感じられた。筆者も公共部門の消防車の準備を手伝ったが、子どもたちがダンボールで作成してきた消防車が力作で、制作者の子ども自身から、「この部分はこうしてほしい」という細かい指示があった。子ども主体の精神が子どもたち自身の活動する姿から感じられた。

当日は、前日の天気予報が外れて雨が降らなかったこともあり、小倉キャンパスL棟の入口には、10:00の開場を前に多くの子どもたち、保護者の列ができた。わかばこどものまちCBTでは、入場時に参加費300円と引き換えに、市民証と“300P”(PはわかばこどものまちCBTの通貨)が渡される。入場をするとお仕事センターがあり、自分にあった仕事を見つけて取り組む。その時間を経て市民証に印をもらおうと、“ハッピー銀行”でさらに“P”を得ることができる。入場とともに“300P”があるため、どんな仕事をしたらよいか困ったら、まずは“P”を使ってまちを楽しんでから、自分にあった仕事を見つけて働くこともできる。まちには、“ゲームコーナー”“フードコート”を楽しんだり、“楽校(がっこう)”ではけん玉を学べたり、“ハッピーこども園”では、幼い子どもたちの面倒やお手玉などの昔遊びを堪能することができる。子どもたちのプロデュースした“まち”は、幼い子どもや初めて参加する子どもにとって参加しやすいしくみとなっていた。

わかばこどものまちCBTでは、実施前日の夕方に見学会の時間を設けて、地域の大人の理解を広げ、保護者が安心して子どもを参加させるための工



植草学園キャンパスで準備に励む子どもたち



お仕事センターで仕事を探す子どもの様子



LIVE中継の子どもとサポートする大学生

夫をしていた。当日は、大人カフェスペースを設けて、大人が過ごすことができるスペースを準備した。大人スペースからは、わかば子育てフォーラムのパネル展示に参加することができ、“ハッピーこども園”にもつながっている。そこでは、幼児と親子で参加できる遊び場が提供されていた。小学生以上の子どもが参加できる「こどものまち」であるが、兄弟など幼い子どもも親子で参加できる場が準備されており、兄弟、親子支援の取り組みにもなっていた。さらに、大人スペースでは“こどものまちLIVE中継”をみることができた。“カメラマン”という仕事で、子ども自身がi-padを持って“まち”を歩き回り、子どもたちが撮影した様子が同時配信されていた。この取り組みは、東京情報大学の学生とゼミの協力があって展開された。こどものまちなりの取り組みは、こうした近隣大学も参加した地域連携にもつながっている。

筆者が大人スペースを見学している際には、赤十字が背中に刻まれた白いユニフォームを来た子どもたちが大人スペースにきて仕事をしていた。大人スペースにいる保護者や大人の肩もみ・マッサージをする仕事のようなものである。実行委員会は、保護者からしばしば「子どもたちの様子を見ることができるのか」という問い合わせを受けていた。しかし、こどものまちなには基本的に保護者は立ち入ることはできない。

実際、保護者が自分の子どもの側で寄り添わなくても、多くの子どもたちの生き生きと主体的に取り組む姿をみることで、彼らも安心して子どもを任せることができたようである。

今回の取り組みは、植草学園の小倉キャンパスL



フィナーレで盛り上がるコアスタッフの子どもたち

棟1階のすべての空間を使用して行われたが、最後にMスタを大きく開いて、ファッションショー、ダンス、フィナーレが催された。ファッションショーではLGBTへの理解を広げるための取り組みや、当日見学を訪れた千葉市長熊谷氏からもコメントを頂くことができ、子どもたちだけでなく、保護者や大人スタッフの“まち”への思いを高める結果となった。

植草学園からも大学生および短大生あわせて20名ほどの学生がボランティアの大人スタッフとして参加した。参加した学生からは「子どもたちが自分で考えて行動することができていて素晴らしい」「大人が心配せずとも、子どもたちは自分で考えて自分で行動していて、子どもの力は大人が思っている以上だと感じた」「手助けするだけでなく見守るかわりが子どもの力を伸ばすことにつながることを学んだ」等の感想を得ることができた。

4. 「Reach to くまもと」の取り組み

今回のわかばこどものまちCBTでは、「Reach to くまもと」という言葉がスローガンとして掲げられていた。2016年4月に起こった熊本地震を受けて、わかばこどものまちCBTを通して子どもたちの力で熊本の子どもたちを励ましたいという思いが込められている。もともとコアスタッフの子どもの一人が、熊本県・益城町の避難所で「こどもボランティア」として活躍する子どもの姿を見たことがきっかけであった。彼らは「こうした子どもたちの姿が、“こどものまち”における自分たちにつながるものがある」と感じ、コアスタッフ会議で議題として取り上げた。子どもたちの思いを益城町に届けたい



「Reach to くまもと」を掲げるコアスタッフ

ということから、さまざまな関係者の協力を得て、「わかばこどものまちCBT」からビデオレターとしてメッセージを送ることになった。メッセージビデオの作成には東京情報大学の学生が協力し、メッセージビデオの配布には益城町教育委員会の理解、協力を得て実現した。さらに、この子どもたちの思いやメッセージを送る取り組みは波及していく。熊本県・益城町に隣接する西原村にて実施される「つなGOランド」というイベントの1ブースをお借りして、「ミニミニこどものまち」を届けるプロジェクトが立ち上がった。コアスタッフの子ども小学4年生4名が代表で“まち”を届ける意思を固め、保護者の同意を得た。熊本まで行くことができない子どもたちも事前準備に積極的に参加した。彼らは、被災地の現場である熊本にPTSDを抱える子どもも多くいることを知り、「PTSDとは何か」「どんなふうになるのか」「そんなときはどうすればいいのか」などのレクチャーも受けた。熊本に向けて11月5日(土)に千葉を出発。子どもたちに同行して、わかばCBT実行委員長の田中氏とともに、筆者も熊本に向かうことになった。また、現地では子どもたちの活動をサポートしてくださる大人スタッフも集結した。

熊本は、震災から半年がたったが、その爪痕は色濃く残っており、ブルーシートを張られた屋根やいまだ半倒壊状態の家もいまだ多く残っていた。その様子を見ながら、現地に向かう子どもたちの表情には、厳しい現実がすぐそばにあることを実感している様子が見られた。会場は熊本県・西原村にある山西小学校の敷地内、小学校前には社会福祉



熊本の子どもたちと触れ合う子どもの様子

協議会も隣接しており、その敷地も利用して、主に九州全土から多くのブースが参加していた。食べ物のブースがあれば、私たちと同様の子どもが楽しめるブースもあった。こどものまちの熊本出張については、事前に益城町教育委員会を通して、近隣校にチラシを配布いただいた。その甲斐もあってか、当日は多くの来場者をむかえることができ、多くの子どもたちが“P”を使用してこどものまちブースで遊んでくれた。千葉から準備してきたワークショップの工作やアクセサリーなどはすべて完売。何よりも、子どもたちの活躍は素晴らしく、はじめての厳しい環境にもかかわらず、文句一つ言わずに取り組んでいた。朝早くの会場の準備から始まり、多くの子どもたちが来場した折には、大きな声を出して「いらっしやいませ」「わかばCBTです」と声を張り上げる姿が見られ、子ども自身から「本当に来てよかった」という言葉を得た。疲れている様子は一つも見せず、文句一つ言わない子どもたち。環境を準備し与えれば、子どもたちは自ら責任を感じて、それを果たすための努力を惜しまない。子どもたちのサポート役として現地に同行した大人の一人とし



全国から集まるメッセージの前で
(益城町教育委員会にて)

て、大人自身ももう一度学ばなければならない姿勢を、子どもたちから逆に学ばされた。

翌日は朝から益城町教育委員会に訪問し、これまでの理解、協力へのお礼とともに、西原村での「ミニミニこどものまち」の取り組みについて報告した。さらに来年のわかばこどものまちCBTに、ぜひ益城町の子どもたちを招待したいという決意表明も伝えた。地震発生当時の事についても説明くださり、災害と向き合う現実を学ぶことができた。益城町教育委員会は、「Reach to くまもと」のきっかけを与えた「益城町子どもボランティア」が活躍していた避難所があった益城町総合運動場と同じ敷地内にある。現在は避難所の役割は終えていたが、依然として一千人以上の人々がそこで生活していた痕跡が色濃く残っていた^{iv}。こうして、子どもたちの訪問は終了した。

5. 大学—地域連携による「こどものまち」の取り組みの意義について

現在、日本で全国的に展開されている「こどものまち」であるが、千葉においてもその他においてもその取り組みの魅力は「子ども主体」を大切にしている点である。多くの子育て支援施策やそれに準じた子育て支援の場づくりの取り組みは、大人主体で進められるプロジェクトが多い。大人の「子どもたちにこうなってほしい」という願いがもとになる。一方でこどものまちは、子ども自身が試行錯誤しながら「こうしたい」「こうなりたい」と考える場や環境を子ども主体で作りに上げていく。大人はもっぱらそのサポート役となり、子ども自身が主体的に考え、行動できるように環境整備をしていくことに意味がある。

多くのこどものまちな取り組みにおいて「子どもと大人の関係性」が課題となる。「大人が口出ししないこと」を、子どもたちから指摘されることも多いが、子どもに対する保護主義的な子育て観が中心となってきた歴史的背景の中で、子どもも大人もお互いにどのような距離感で、どのように関係性を持っていくことが、子どもの成長・発達につながるのか、大人にとっても学び、成長になるかを検討していく機会と経験を、こどものまちな取り組みは与えている。わかばこどものまちCBTの取り組み

は、多くのこどものまちや、千葉市のこどものまちCBTの経験を経ての取り組みである。そのため、経験を重ねて築きあげられてきた「子どもと大人の関係性」の下に、次の一步を踏み出している。

また、今回の取り組みは、大学の敷地を利用して実施された、大学—地域連携による子育て支援の取り組みである。他のこどものまちでも、大学を敷地として実施されているものもあると聞かすが、地方の中核都市では人口減少の方向性が強い中で、大学という場が子育て支援に寄与する役割は大いに意義がある。本学では、子育て支援センターの併設など、他にも多くの子育て支援の取り組みに寄与してきたが、わかばこどものまちCBTの取り組みは、新たな取り組みとしてこれからも本学が継続して取り組んでいくべき子育て支援の取り組みとなったと考えている。さらに、近隣他大学の学生やゼミも参加、協力を頂くことができ、子どもを通して、大学連携につながったことも意義が大きい。

さらに、「Reach to くまもと」の取り組みは、「子どもの思い」が被災地・熊本につながり、その思いを叶えることに多くの大人や関係者が共鳴し、協力したことで成立した。活動協力にはNPO法人mama's hag（小田原市）、全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）、ココファーム（熊本県菊池市）等、多くの協力団体の理解を得て、実現した。子どもたちの旅費等の支援は、筆者が研究代表者である科学研究費補助金「コミュニティを基盤とした子どもの公共空間と子ども施策の検討」（平成26～28年度）によって実現した。こうした大人の理解、協力を得ていることを、熊本で活動したコアスタッフの子どもたちはしっかりと受けとめていると感じた。先にも述べたが、3日間の強行軍の中、文句一つ言わず、自分の保護者が同行していなくてもしっかりと活動した子どもたちの姿は、日頃教授している大学生よりもりりしく見えた。子どもたちは、自らの思いを果たして思いっきり活動するだけで成長するのではない。周囲の大人がそうした子どもたちの思いを受けとめ、それを支援していることを、逆に子どもたち自身が受けとめ、実感しながら、子ども自身がより成長し、子どもと大人の関係性が育まれていく。大学で行われることで、多くの学生がそうした子どもの姿を目にしていくことに

なる。大学としての学生への教育効果も目覚ましいものがある。こうした相乗効果のある関係性を築いていくことが、これからの子どもの学びの場や子育て支援の取り組み、筆者がその他で実施している子どもの居場所づくりにおいても重要な視点ではないか。

6. おわりに

本稿では、第2回わかばこどものまちCBTの取り組みとその経過、およびそこから派生してつながった「Reach to くまもと」の取り組みについて報告した。一連の活動展開を通して、こどものまちの取り組みの意義や、大学—地域連携による子育て支援の取り組みの意義についても検討してきた。いま、都市の子どもたちには思いっきり体験できるような成育環境は限られている。一昔前と異なり、子どもと大人の社会の分離が曖昧化していく中で、子どもに対する大人の保護主義的な考え方が台頭しつつある。確かに、子どもたちが社会における様々な

危険に晒されるようになってきていることはわかる。しかし、それでは、子どもたちの自由な発想や創造力は育たない。多様な子どもの学びの場が求められる中で、今回のような取り組みの効果について検討することは有意義である。今後も活動を継続するなかでさらなる効果について検討していきたい。

参考文献

- i) 木下勇, 卯月盛夫, みえけんぞう「こどもがまちをつくる～『遊びの都市—ミニ・ミュンヘン』からのひろがり」, 2010, 萌文社, p.14.
- ii) ヴォルフガング・ザハリアス, カーラ・ザハリアス (2006)「ミニ・ミュンヘン～遊びのまちの考え方と仕組み」ドイツ・日本子どもの参画交流実行委員会 in 東京&千葉『遊びに学ぶまち ドイツ・日本子どもの参画交流会 講演資料』6-13.
- iii) 千葉県こども未来局こども未来部こども企画課HP <https://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/kikaku/kodomonomachibt.html> (2017.1.20参照)
- iv) わかばこどものまちCBT・FBサイト <https://www.facebook.com/wakaba.kodomonomachi> (2017.1.20参照)

